

自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う小学校外国語活動の指導の在り方 — 「話すこと〔やり取り〕」における言語活動の工夫とコミュニケーション・ストラテジーの活用を通して —

呉市立安登小学校 中島 愛菜

研究の要約

本研究は、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う外国語活動の指導の在り方について考察したものである。文献研究から「自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地」を『誰に』『何のために』伝えるかを意識し、自分が本当に思ったことや考えたことを動作や表情なども手掛かりに何とかして伝えようとしたり、相手の伝えたいことを理解しようとしたり、反応を返そうとしたりすること」と整理した。この伝え合う力の素地を養うために、研究授業の単元において単元ゴールの言語活動、ステップアップの言語活動、帯活動を位置付け、帯活動においてコミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導を行った。その結果、児童が自分の考えや気持ちなどを伝え合おうとする姿に変容が見られた。

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年告示）の外国語活動では、「思考力、判断力、表現力等」の育成に関わる目標として、「身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う」¹⁾ことが示されている。

所属校で授業を担当する第3学年の児童の姿を見ると、簡単な語句や基本的な表現について聞くことや、基本的な表現を用いて挨拶を交わしたり、感謝の気持ちを述べ合ったり、簡単な指示をしたり応えたりすることはおおむねできている。しかし、自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら自分の考えや気持ちなどを簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことや、自分や相手のことや身の回りの物について、質問をしたり質問に答えたりすることには課題がある。この要因として、反復練習のようなやり取りにとどまり、自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動には至っていなかったことが考えられる。そこで、外国語活動において指導の工夫を行い、児童に自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養いたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことについて

(1) 自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地について

ア 自分の考えや気持ちとは

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編（平成30年、以下「29年解説」とする。）外国語活動の「思考力、判断力、表現力等」に関わる目標には、「身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う」²⁾ことが示されている。自分の考えや気持ちなどを伝え合うことについて、山田誠志（2018）は、児童は伝えたいと思うことがあるから、それを伝えるための英語表現を学び、児童が伝えたいと思うのは、多くの場合、自分が本当に思ったことや考えたことであると述べている⁽¹⁾。このことから、自分の考えや気持ちとは、身近で簡単な事柄について、児童が本当に思ったことや考えたことであると捉えることができる。

イ 伝え合うとは

「29年解説」には、『伝え合う』とは、一方向ではなく、双方向で感情や情報についてのやり取りがある活動を示している。つまり、話し手は、聞き取りやすい声で言ったり動作を交えたりしながら聞き手を意識して分かりやすく伝え、聞き手はうなずくなどの反応を返して相手の考えや気持ちを受容しながら聞こうとするなどの態度を育てることが求められる。³⁾と示されている。また、自分の考えや気持ちなどを伝え合う際には、言葉だけでなく動作や表情を手掛かりにすることで相手の意図をよりよく理解したり、動作を加えて話すことで、自分の考えや気持ちなどをより分かりやすく伝えたりすることを児童が実感できるようにすることが重要であるこ

とが示されている⁽²⁾。このことから、伝え合うとは動作や表情も手掛かりにして相手に分かりやすく伝えたり、相手の伝えたいことを理解したり、反応を返したりすることであると捉えることができる。

ウ 自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地とは

「29年解説」外国語活動の「思考力、判断力、表現力等」に関わる内容について、「ア 自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を使って、相手に配慮しながら、伝え合うこと」「イ 身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう、工夫して質問をしたり質問に答えたりすること」⁽⁴⁾が示されている。このことについて、大城賢（2017）は、アは「相手に配慮しながら」という点、イは「考えや気持ちなどが伝わるよう、工夫して」という点が鍵になると述べている⁽³⁾。また、狩野晶子（2017）は、相手に配慮して伝え合うには「誰に」「何のために」伝えるのかに意識を向けさせる必要があり、その意識付けこそがコミュニケーションを行う素地となると述べている⁽⁴⁾。また、卯城祐司（2013）は、すれ違いや誤解にくじけないで相手の伝えることを積極的に聞こうとし、また相手には分かりやすく伝えるよう努める相互理解の姿勢を学ぶのが外国語活動であると述べている⁽⁵⁾。つまり、自分の考えや気持ちなどを伝え合うには、相手意識や目的意識をもち、どうすれば自分の考えや気持ちが伝わるか、相手の考えや気持ちを理解できるかを考え、言語に加えて動作や表情など非言語による手段も用いながら何とかして伝えよう、理解しよう、反応を返そうとする姿勢を育てることが大切であると考ええる。

以上のことから、本研究における自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地について、『誰に』『何のために』伝えるかを意識し、自分が本当に思ったことや考えたことを動作や表情なども手掛かりに何とかして伝えようとしたり、相手の伝えたいことを理解しようとしたり、反応を返そうとしたりすること」と定義する。

(2) 自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うためには

外国語活動において自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うために、次の2点を授業改善の視点とする。

ア 言語活動の工夫

「29年解説」外国語活動の目標には、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュ

ニケーションを図る素地となる資質・能力を育成することを目指すことが示されている⁽⁶⁾。言語活動について、小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（以下「ガイドブック」とする。）によると、『実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う』活動を意味する。⁽⁵⁾と示されている。

直山木綿子（2021）は、言語活動を成立させる要素として、①伝え合う目的や必然性があること②相手意識をもって取り組めること③実際に自分や相手の気持ちや考えを伝え合う「本物」のコミュニケーションであること④伝え合うことの喜びや意義を見出すことができることの四つを示している⁽⁷⁾。この四つの要素を取り入れた言語活動を行うことで、児童に、誰に、何のために伝え合うのかを意識させ、伝え合う必然性を感じさせることで自分が本当に思ったことや考えたことを何とかして伝え合おうとすることにつながると考える。

さらに、直山（2021）は、目指す指導の展開として、指導者と児童が英語でやり取りを続ける中で、児童自らが言語材料の意味と使い方を理解し、実際のコミュニケーションの中で活用しながらゴールの言語活動に向けて必要な力を身に付けていくことを示している⁽⁸⁾。このことから単元を通してステップアップしながら言語活動を積み重ねることが大切であると分かる。

そこで本研究においては、四つの要素を取り入れた言語活動の設定、単元ゴールの言語活動の充実を目指して、単元ゴールにつながる各時間のステップアップの言語活動の設定をして指導を行う。このような言語活動を通して、伝え合うことの楽しさや伝え合うことができた達成感を感じることができ、さらに伝え合おうとする自信や意欲につながり、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことを支えるものとなると考える。言語活動の工夫の具体については次節に述べる。

イ コミュニケーション・ストラテジーの活用

泉恵美子（2017）は、小学校英語では児童が使用できる語彙や表現が限られ英語のスキルが十分ではないため、困ったときに聞き返しや確認をしたり、つなぎ語やジェスチャーなどを使用して身体で伝えたり、相づちや反応をしたりしながら表情豊かに相手とコミュニケーションを行うといった方略的能力を育成すべきであると述べている⁽⁹⁾。方略的能力とは、コミュニケーション能力の構成要素の一つであり、清水遥（2018）は、コミュニケーション能力の構成要素を次頁表1のように示している。

表1 コミュニケーション能力の構成要素⁽¹⁰⁾

文法能力	語彙、文型、文法、音声、文字などのいわゆる言語に関する知識とそれを運用できる能力
社会言語学的能力	ある言語が話されている社会の社会・文化的規範にしたがって、その言語を適切に使用できる能力
談話能力	文と文を適切に結びつけて、文章や一連の発話をまとまりのあるものとして理解し、構成できる能力
方略的能力	コミュニケーションをより円滑に行ったり、自身の言語技能の不完全さを補ったりするために、コミュニケーション・ストラテジーを効果的に使用してコミュニケーションを続ける能力

表1の方略的能力にあるコミュニケーション・ストラテジーとは、コミュニケーションを続けるためのスキルである。

さらに、四つの能力を発達段階に応じてどのように育成するか、清水（2018）は、コミュニケーション能力のモデルを松川・大城（2008）を基に、図1のように示している。図1に示すとおり、小学校段階では方略的能力の占める割合が大きく、方略的能力を育成するためにコミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導を行うことは、初めて外国語に触れる段階の中学年の児童にとって、限られた語彙や表現で自分の考えや気持ちなどを伝え合うために有効であり、今後の外国語学習にもつながるものであると考えられる。

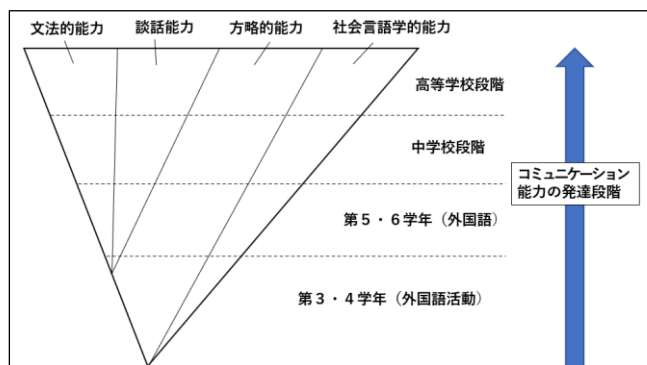


図1 発達段階に応じたコミュニケーション能力の動的モデル⁽¹¹⁾

そこで本研究では、「話すこと [やり取り]」の言語活動において、コミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導を行うこととする。

2 自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う指導の在り方

(1) 「話すこと [やり取り]」における言語活動の工夫について

自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うために、①単元ゴールの言語活動、②ステップアップの言語活動、③帯活動を設定し、「話すこと [やり取り]」に重点をおいて指導を行う。

①の単元ゴールの言語活動については、前節(2)アで述べた言語活動を成立させる要素を具体化し、ステップアップの言語活動や帯活動で学習したことを活用して自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができるようにする。また、児童と目指す姿を共有し見通しをもって活動できるようにする。四つの要素を取り入れた言語活動のイメージを図2に示す。

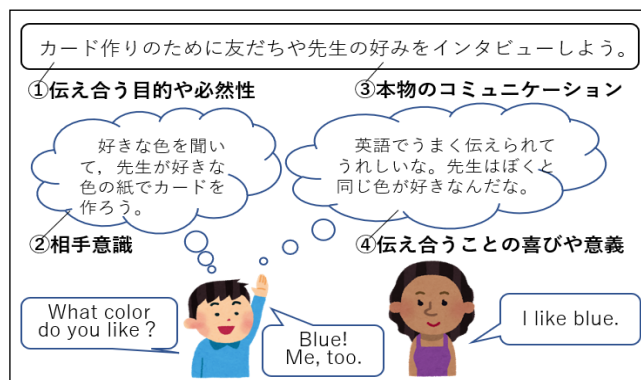


図2 四つの要素を取り入れた言語活動のイメージ

②のステップアップの言語活動では、ゴールの言語活動とのつながりを意識しながら各時間に言語活動を設定する。始めの段階では、授業者と児童のやり取りを中心に行う。意味のあるやり取りの中で、表現を聞く機会を十分に与え、体験的に表現の意味を理解できるようにする（ステップ1）。指導者と児童のやり取りができるようになったら、表現に慣れ親しませるための児童同士のやり取りを行う（ステップ2）。表現に慣れ親しんできたなら、単元ゴールと類似した場面設定の中で児童同士のやり取りを行う（ステップ3）。また、ステップアップの言語活動においても、誰に、何のために伝えるのかを明確にし、自分の考えや気持ちを分かりやすく伝え、相手の伝えたいことを理解するためにどんな工夫ができるか考えさせながらやり取りを行う。

③の帯活動では、主にコミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導を行う。本研究で活用するコミュニケーション・ストラテジーの具体と指導については、次項に示す。

(2) コミュニケーション・ストラテジーの具体と指導について

狩野（2017）は、「意味のある、伝える必然性のあるコミュニケーションの場面を設定し、その中でもっともしっかり伝えたいという児童の欲求が高まったところで、伝え合うための手立て、いわゆる『コミュニケーション・ストラテジー』を示したい。（中略）児童の伝えたい気持ちと具体的な手立てが

有機的に結びつくことで、実際の言語運用場面に活用できる知識となっていく」⁶⁾と述べている。また様々な工夫が全て「コミュニケーション」に含まれるのだという意識付けこそが重要であり、それが「素地」として、限られた言語材料の中でいかにして伝え合うかを工夫する「思考力、判断力、表現力等」の広がりへとつながっていくことが期待されると述べている⁽¹²⁾。

このことから、言語活動を通して行うコミュニケーションの目的や場面、状況に応じて、児童が自分の考えや気持ちを何とかして伝え合う際の手立ての一つとしてコミュニケーション・ストラテジーを活用することは有効であると考えられる。

泉（2017）は、小学校で指導を勧めるストラテジーとして、英語の単語や表現が分からないときに用いるストラテジー、理解を確認したいときに用いるストラテジー、会話を円滑に進めるストラテジーの大きく分けて三つがあると述べている⁽¹³⁾。また、泉（2017）は、小学校で指導することが望まれるストラテジーについて、下の表2を示している。

表2 小学校での指導が望まれるストラテジー⁽¹⁴⁾

- ・時間を稼いだり考えていることを伝える: well, let's see..., Um,
- ・もう一度言ってもらおう: Sorry? Pardon? Excuse me? What?
- ・助けを求める: How do you say...in Japanese/ English?
- ・確認する: What do you mean? Do you mean...? Do you understand? What is...? OK?
- ・分からない単語や表現にジェスチャーを用いる: Mime, gestures
- ・反応する: Great. It's great/cool/nice.... Me, too. Me, neither. Good job! Sounds good/great. Too bad. Not good.
- ・相手に意見を求める: How about you?

以上のことを踏まえ、本研究では、表2を中心に「ガイドブック」に掲載されている対話を続けるための基本的な表現例等も参考にして、身に付けさせたいコミュニケーション・ストラテジーを図3のようにまとめ、児童に分かりやすいよう「やりとりのこつ」と言い換えて提示し指導を行うこととする。

めざせ！コミュニケーションマスター ☆やりとりのこつ☆		
何と言ったらよいのか 分からないとき	相手が何と言っているか 分からないとき	じょうずにやりとりを つづけたいとき
♥ 時間をかせぐ Um... , Well...	♥ もう一度言ってもらおう Once more, please.	♥ はんのうする Me, too. I see. Really?
♥ 言いかける (例4.12) It's delicious. → It's good.	♥ たしかめる OO, OK?	♥ かんそうを言う Good! Nice!
♥ 助けをもとめる OO in English, please.		♥ くりかえす (例4.12) I like apples. → Apples.
♥ ジェスチャーをする		♥ 相手のことをきく How about you?

図3 身に付けさせたいコミュニケーション・ストラテジー（稿者作成）

泉（2017）によると、コミュニケーション・ストラテジーを指導する過程について、教師が使用のモデルを示し、児童に気付きを促すこと、コミュニケーション・ストラテジーを用いて練習を行い、実践を通して習熟とモニタリングを行うこと、その効果について振り返りにより内省を行うことが示されている⁽¹⁵⁾。

そこで本研究では、帯活動において、①授業者がALTや児童とのやり取りの中でモデルを示し、どんな目的でどのコミュニケーション・ストラテジーを活用したか気付きを促す、②児童がコミュニケーション・ストラテジーを用いてやり取りをする、③振り返りを行い、効果について共有する、という流れで指導を行う。また、コミュニケーション・ストラテジーを帯活動以降の言語活動でも、必要に応じて活用するように促し、児童が目的や場面、状況に応じて自己選択して活用できるようにする。さらに動作や表情、ジェスチャーなど非言語による手段を用いることも分かりやすく伝え合うための手掛かりとなることも感じさせていく。

(3) 研究構想図

これまで述べてきたことを基に、研究の構想を図4に示す。

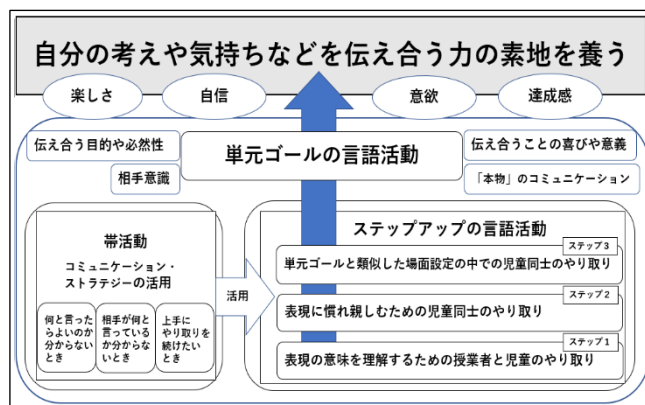


図4 本研究の構想図

III 研究仮説と検証の視点と方法

1 研究仮説

「話すこと [やり取り]」における言語活動を工夫し、コミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導を行えば、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、次頁表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
①言語活動の工夫は、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことに有効であったか。	プレテスト ポストテスト 行動観察 振り返り
②コミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導は、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことに有効であったか。	

IV 研究授業について

- 期 間 令和3年12月8日～令和3年12月22日
- 対 象 所属校第3学年（1学級16名）
- 単元名 「This is for you!」
～めざせコミュニケーションマスター！上手にやりとりをして友だちや先生が喜ぶカードをおくろう！～
- 単元目標

学級の友だちや先生に喜んでもらえるカードを作るために、好きな物や欲しい物について相手に伝わるように工夫しながら話したり、反応を返しながら聞いたりして、自分の考えや気持ちを伝え合う。
--

○ 単元計画（全6時間）

時	◆目標 ○主な学習活動など
	<div>帯活動</div> <div>ステップアップの言語活動</div>
1	<p>◆日本と外国の文化の違いに気付くとともに、欲しい物を探ねたり答えたりする表現を知る。</p> <p>○単元のゴールを知る。</p> <p>○コミュニケーション・ストラテジーについて知る。</p> <p>○Activity①（主に指導者と児童のやり取り）</p> <p>・欲しい物を探ねたり答えたりして、クリスマスプレゼント人気ランキングを作る。</p>
2	<p>◆日本語と英語の音声の違いに気付くとともに、形や身の回りの物を表す言い方を知り、欲しい物を探ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。</p> <p>○コミュニケーション・ストラテジーの活用（好きな色）</p> <p>【時間を稼ぐ】【反応する】</p> <p>【感想を言う】</p> <p>○Activity②（指導者と児童のやり取りから児童同士のやり取りへ）</p> <p>・欲しい物を探ねたり答えたりして、形クイズをする。</p>
3	<p>◆形の言い方や好きな物や欲しい物を探ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ、欲しい形を伝え合う。</p> <p>○コミュニケーション・ストラテジーの活用（好きな形）</p> <p>【確かめる】【繰り返す】</p> <p>○Activity③（児童同士のやり取り）</p> <p>・欲しい物を探ねたり答えたりして、形集めゲームをする。</p>
4	<p>◆友だちに贈るクリスマスカードを作るために、相手に伝わるように工夫しながら話したり、反応を返しながら聞いたりして好きな物や欲しい物を伝え合う。</p> <p>○コミュニケーション・ストラテジーの活用（好きな動物）</p> <p>【言い換える】【助けを求める】</p> <p>【ジェスチャーをする】</p> <p>○Activity④（児童同士のやり取り）</p> <p>・友だちに好きな物をインタビューする。</p> <p>・欲しい物を探ねたり答えたりして材料を集め、カードを作る。</p>
5	<p>◆友だちに贈るクリスマスカードを作るために、相手に伝わるように工夫しながら話したり、反応を返しながら聞いたりして好きな物や欲しい物を伝え合う。</p> <p>○コミュニケーション・ストラテジーの活用（好きなアニメ）</p> <p>【もう一度言ってもらおう】</p> <p>【相手のことを聞く】</p> <p>○Activity⑤（児童同士のやり取り）</p> <p>・欲しい物を探ねたり答えたりして材料を集め、カードを作る。</p> <p>・作ったカードを紹介して、友だちにカードを贈る。</p>
6	<p>◆ALTに贈るクリスマスカードを作るために、相手に伝わるように工夫しながら話したり、反応を返しながら聞いたりして、好きな物や欲しい物を伝え合う。</p> <p>○単元ゴールの言語活動（ALTと児童のやり取り、児童同士のやり取り）</p> <p>・ALTに好きな物をインタビューする。</p> <p>・欲しい物を探ねたり答えたりして材料を集め、カードを作ってALTに贈る。</p> <p>○単元の振り返りをする。</p>

V 研究授業の分析と考察

1 言語活動の工夫は自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことに有効であったか

(1) プレテストとポストテストの結果より

ア プレテストの内容

①実施日：令和3年12月8日 ②対象児童：第3学年16名 ③形式：ALTとの対面式 ④課題：ナキア先生と仲良くなるために、好きな物をインタビューしよう！

イ ポストテストの内容

①実施日：令和3年12月22日 ②対象児童：第3学年16名 ③形式：ALTとの対面式 ④課題：ナキア先生に喜んでもらえるようなクリスマスカードを作るために、ナキア先生の好みをインタビューしよう！
--

ウ プレテストとポストテストの採点の基準

	思考・判断・表現
a	(b)に加えて、会話の広がりにつながる発話をしている。
b	自分の聞きたいことを質問したり、相手の質問に答えたり、相手の発話に反応を返したりして、動作や表情なども手掛かりに自分の考えや気持ちなどを何とかして伝え合っている。
c	(b)を満たしていない。

エ プレテストとポストテストの結果

プレテストとポストテストの結果を表4に示す。

表4 プレテストとポストテストの結果 (n=16)

テスト		ポストテスト			計(名)
		a	b	c	
プレテスト	a	0	0	0	0
	b	4	6	0	10
	c	0	4	2	6
計(名)		4	10	2	16

プレテストでは、質問したいことが思い浮かばず沈黙したり何と答えてよいか分からず視線を外したりする児童や相手の発話に対して反応を示さない児童が16名中6名見られた。ポストテストでは、16名中14名の児童が、自分の聞きたいことを質問したり質問に答えたり相手の発話に反応を返したりして動作や表情なども手掛かりに自分の考えや気持ちなどを何とかして伝え合うことができた。ポストテストにおけるc評価の児童2名については、1名は表現を思い出すことに夢中になり質問に答えなかったためc評価としたが、好きな形を質問する表現が出てこなかった際に自分の好きな形を伝えることで、何とかして形を聞きたいことを伝えようとしていた。もう1名は、質問に答えずに次の質問をするという場面があったためc評価としたが、ALTの発話に反応を返すことができるようになった。目線や声の調子にも変化が見られ、事後の聞き取りでは「もっと先生とお話して仲良くなりたい。」という意欲を示していた。このc評価の児童2名においても何とかして伝え合おうとする姿に変容が見られた。

さらに始めと終わりの挨拶等を除くプレテスト、ポストテストの発話数を分析したところ、全ての児童に発話数の増加が見られた。16名のプレテストの総発話数77回に対し、ポストテストでは151回となり、約2倍に増加した。ポストテスト後の聞き取りによると「カードを作るためにいっぱい聞きたいことがあった。」「たくさん聞くとナキア先生のいろんなことが知れる。」などと答えていた。ALTが喜ぶカードを作るという明確な相手意識や目的意識を

もってインタビューを行ったことで、必然性を感じながら自分の考えや気持ちを伝え合うことにつながり、発話数が増加したと考えられる。

(2) プレテストとポストテストにおける個の変容

以下に示すのは、児童Aのプレテストとポストテストのやり取りである。波線は、自分の考えや気持ちを表現している箇所である。なお、以降に示すやり取りでの自分の考えや気持ちとは、目的に沿って自分が本当に聞きたいと思ったことを相手に質問している箇所、相手の質問に答えている箇所、自分の欲しい物を考えて相手に伝えている箇所とする。

(プレテスト:c 評価)
児童A: えっと、えっと I like...えっと... (沈黙)
※指導者の声掛け「What? (で始めてみようか。)」
児童A: What...cake do you like?
ALT: I like strawberry cake. How about you?
児童A:Chocolate cake.
ALT: Oh, you like chocolate cake. Me, too.
児童A: ...I...えっと...I like character.
ALT: Um...what character do you like?
児童A:Tanjiro.
ALT: Tanjiro...ah...me, too.

児童Aは、普段の学習状況において話をよく聞いて学習に取り組むが発言等については控えめな印象の児童である。プレテストでは、英語で表現することに自信がなく、なかなか発話をする事ができなかった。研究授業では、友だちとのやり取りの中で自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えようと進んでジェスチャーを取り入れたり、友だちにアドバイスをしたりするなど、単位を通して意欲的に学習に取り組んでいた。

(ポストテスト:b 評価)
児童A: What character do you like? (手振りを付けて)
ALT: Um... I like Pikachu.
児童A: Pikachu.
ALT: (うなずく)
児童A: Me, too. (ガッツポーズを付けて)
ALT: Oh, same same. Good.
How about you? What character do you like?
児童A: Cake?
ALT: (うなずいて) Which character do you like?
児童A: Chocolate cake.
ALT: Chikorita?
児童A: (小さくうなずくが、ん?という表情)
ALT: Oh... I see.
児童A: ...What fruits do you like? (手振りを付けて)
ALT: Um...I like strawberries.
児童A: Really?
ALT: Yes. I really like strawberries.
How about you? What fruits do you like?
児童A: Fruits?
ALT: Uh-huh.
児童A: I like...umm...umm...peach.
ALT: Ah, peach. Very delicious. Me, too. I like peaches.
児童A: What shape do you like? (手振りを付けて)
ALT: Um...I like hearts.
児童A: Hearts.
ALT: Uh-huh. And, stars.
How about you? What shapes do you like?
児童A: I like...circle. (ジェスチャーを付けて)
ALT: Oh, circle. Me, too.

ポストテストでは、進んでALTに質問をし、ALTの質問にジェスチャーなどを付けながら答えることができた。授業後の振り返りには、「ナキア先生に分かりやすくするために、ジェスチャーと繰り返しをした。」と記述しており、相手意識や目的意

識をもって自分なりに工夫をしながら何とかして伝え合おうとしていることが分かる。しかし、やり取りの中で会話がすれ違った場面も見られたため、自分の考えや気持ちが相手に正しく伝わっていないと感じたときは、さらに聞き返したり確認したりすることができるよう、具体的な状況に応じた対応の仕方について指導を行う必要がある。

(3) 言語活動での様子より

ステップアップの言語活動において友だちの好みをインタビューし、得た情報を生かして材料を集めるやり取りを行い、単元ゴールの言語活動においても同様の流れでやり取りを行った。児童はカード作りのためにインタビューをする、材料を集めるという相手意識や目的意識、必然性を感じながら伝え合う様子が見られた。やり取りの流れを以下に示す。

(ALTへのインタビューの一部)
児童B: ええっと、what color do you like?
ALT: Um...I like blue and gray. ※1
児童B: (うなずきながら小声で) Blue and gra... (ALTと重なる)
ALT: How about you?
児童B: Ah...purple and blue.
ALT: Purple and blue. Oh, good. Me, too.
児童B: (うなずく) Ah... (不明瞭) ...character do you like?
ALT: Um...what character do I like? I like Pikachu. ※2
児童B: (うなずきながら) Pikachu.

(カードの材料を集めるやり取りの一部)
指導者: What do you want? (色画用紙を示して)
児童B: Gray, please. (指を差して) ※1 インタビューで聞いたALTの好きな色
指導者: Here you are.
児童B: Thank you.
(場所を移動して)
児童B: Hello. (手を振りながら)
児童C: Hello. (手を振りながら) What do you want?
児童B: Yellow circle, please. ※2 ALTの好きなピカチュウを作るため
児童C: How many?
児童B: Two. (ジェスチャーをつけて)
児童C: Here you are.
児童B: Thank you.

単元の終わりには、友だちやALTに自分の作ったカードを渡す活動を行った。授業後の振り返りには、活動に対する達成感やさらなる意欲を感じている記述が見られた。児童の振り返りを以下に示す。

- ・ナキア先生にカードをあげて、喜んでもらえてよかったです。
- ・英語で言うとなかなか。家でも英語を使いたいです。また友だちと英語でしゃべりたいです。
- ・友だちや先生にカードを渡すことができた。これからも分かりやすいように外国語をもっと話したい。

(4) 振り返りシートより

単元末の振り返りの「どんな目的をもって学習に取り組みましたか。」に対して、以下のような記述が見られ、16名中14名の児童が、単元のゴールに関わる記述をしていた。このことから目的意識をもって活動に取り組んでいたことが分かる。

- ・ナキア先生や友だちの好きな物を聞くこと。
- ・ナキア先生や友だちと上手にやり取りすること。
- ・ナキア先生や友だちが喜ぶカードを作ること。

また、「この学習で楽しかったことはどんなことですか。」に対して、16名中13名の児童が、以下のような言語活動に関わることについて記述しており

ALTや友だちとのやり取りを楽しみながら活動していたことが分かる。

- ・先生や友だちと英語で話したこと。
- ・ナギア先生や友だちにインタビューしてカードを作ったこと。
- ・インタビューをしてカードを作って喜んでもらったこと。

(5) 検証①の視点のまとめ

以上の結果から単元ゴールの言語活動に向かって児童と目指す姿を共有し、相手意識や目的意識を明確にしてやり取りに必然性を感じさせたことや、ステップアップの言語活動を重ね、表現を繰り返し使いながら意味や使用場面を理解して慣れ親しませたことが、何とかして伝えようとしたり、相手の伝えたいことを理解しようとしたり、反応を返そうとしたりすることにつながったと考える。よって言語活動の工夫は、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことに有効であったと言える。

2 コミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導は自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことに有効であったか

(1) ポストテストの会話分析より

ポストテストにおいて、16名全員がALTとのやり取りの中でコミュニケーション・ストラテジーを活用していた。ポストテストで児童が活用したコミュニケーション・ストラテジーを表5に示す。

表5 ポストテストで児童が活用したコミュニケーション・ストラテジー (回)

何と言ったらいのか分からないとき	相手が何と言っているか分からないとき	上手にやり取りを続けたいとき
・時間を稼ぐ 13	・もう一度言ってもらおう 0	・反応する (Me, too.) 21
・言い換える 2	・確かめる 9	・(I see.) 2
・助けを求め 0		・(Really?) 1
・ジェスチャーをする 1		・感想を言う 0
		・繰り返し 14
		・相手のことを聞く 0

活用していた場面として、自分の考えを伝えるために時間を稼ぐ、相手の発話を確かめる、相手の発話に反応を返す、発話を繰り返す場面が大多数であった。ポストテスト後に、活用したコミュニケーション・ストラテジーとその理由について聞き取りを行ったところ「時間を稼いで聞きたいことを考えた。」「言い換えたら、先生に伝わりやすいと思った。」「反応したら、先生の言ったことが分かったことを伝えられるから。」などと答えていた。児童はコミュニケーション・ストラテジーを自分の考えや気持ちを伝えるための手立てとして、目的や場面、状況に応じて活用しようとしていたことが分かる。

(2) プレテストとポストテストにおける個の変容

以下は児童Dのポストテストにおけるやり取りの一部である。下線はコミュニケーション・ストラ

ジーを活用している箇所である。児童Dは、プレテストでALTに好きなゲームを質問したところポケモンという返答であったが、自分はポケモンが好きでないため、反応に困り沈黙する場面があった。ポストテストでは、ALTに好きなキャラクターを質問して、ピカチュウと返答があったが、ピカチュウはあまり好きでないため「I see.」を活用し、反応を返すことができた。

児童D: What character do you like?
ALT: Um...I like Pikachu.
児童D: Pikachu? 【確かめる】
ALT: (うなずく)
児童D: I see. 【反応する】
ALT: Do you like Pikachu?
児童D: No, I don't. (首を振りながら)
ALT: No? It's OK. What character do you like?
児童D: I like...circle で (ジェスチャーを付けて) 色は...bl... (ALTと重なる) 【言い換える】
ALT: Oh, Doraemon?
児童D: うん。(うなずいて) Doraemon.
ALT: Ah, you like Doraemon. Oh, nice.
児童D: Doraemon, do you like? (手振りをつけて)
ALT: I have never seen Doraemon. But he is cute.
児童D: (笑顔でうなずく)

また、聞き取りによると、好きなキャラクターを聞かれ、ドラえもんは日本語だから伝わらないと思い、形や色で言い換えたと話していた。その後、ALTにもドラえもんが好きかどうか質問することもできた。児童Dは、相手意識をもち、目的や場面、状況に応じて意図的にコミュニケーション・ストラテジーを活用してやり取りを続けることができた。

(3) 言語活動での様子より

帯活動でコミュニケーション・ストラテジーについて指導し、各時間のステップアップの言語活動において、目的や場面、状況に応じたコミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導を行った。児童は、帯活動で主に使用した「What~do you like?」や「Do you like~?」以外の表現を使用する言語活動の場面でも、必要に応じてコミュニケーション・ストラテジーを活用し、何とかして伝え合おうとしていた。児童のやり取りを以下に示す。

児童E: What do you want?
児童F: Yellow...circle, please.
児童E: ...One, two, three, four, five? 【言い換える】
(How many?を思い出せず、指で数える動作をしながら)
児童F: Two. (ジェスチャーをつけて)
児童E: Two. 【繰り返し】 Here you are.
児童F: Thank you.

児童G: What do you want?
児童H: I like...yellow, rectangle...ah, yellow square, please.
児童G: Yes...square. 【繰り返し】 これか。How many?
児童H: ...Once more, please. 【もう一度言ってもらおう】
児童G: あ...How many?
児童H: One, please.
児童G: Yes. Here you are.
児童H: Thank you.

(4) 振り返りシートより

単元末の振り返りの「やり取りのこつは、友だちや先生と自分の考えや気持ちなどを伝え合うときに役立ちましたか。」に対して全員が肯定的回答をし

以下のような理由を挙げている。

- ・やりとりのこつを使うと、相手がうれしいし安心すると思ったから。
- ・こつをたくさんつかうと、うなずいてもらえたから。
- ・先生に何を話しているのか分かってもらえたから。

また、「やり取りのこつをこれからも使いたいですか。」に対しても、全員が肯定的回答をし、以下のような理由を挙げている。

- ・やりとりのこつをつかうと、もっとできることが増えるから。
- ・こつをつかうと、思っていることがみんなに伝わりやすいから。
- ・こつをつかってやり取りができれば、気持ち通じて楽しいから。

児童はコミュニケーション・ストラテジーを活用することのよさを感じ、自分の考えや気持ちを伝え合うことの手立てとしていたことが分かる。

(5) 検証②の視点のまとめ

以上の結果からコミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導を通して、相手の発話に反応を返すことのよさを実感させたり友だちやALTと自分の考えや気持ちを何とかして伝え合うことを体験させたりすることができた。コミュニケーション・ストラテジーの活用は、何とかして伝えようとしたり、相手の伝えたいことを理解しようとしたり、反応を返そうとしたりすることにつながったと考えられる。よってコミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導は、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことに有効であったと言える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことにおいて、言語活動の工夫とコミュニケーション・ストラテジーの活用を促す指導を行った。その結果、相手意識や目的意識をもち、相手に伝わりやすいよう工夫して伝え合おうとする姿に変容が見られ、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことができつつあると考える。よってこれらの指導は、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うことに有効であると分かった。

2 研究の課題

本研究では、言語活動においてやり取りを行う機会を多く設定したが、自己のやり取りの姿について振り返りをさせることが不十分であった。自己のやり取りの姿を、デジタル機器等を活用して客観的に振り返る機会を与えることで、自己のやり取りのよさや課題に気付かせ、よりよい伝え合いの姿につながっていくと考える。

コミュニケーション・ストラテジーの指導につい

ては、帯活動において、コミュニケーション・ストラテジー活用後の振り返りを設定したが、十分な時間を確保できず、効果について実感したり共有したりさせることが十分にできなかった。コミュニケーション・ストラテジーの活用とその効果について気付きを促す活動を充実させることで、コミュニケーション・ストラテジーの有効性をより実感させ、目的や場面、状況に応じて活用することにつながると考える。コミュニケーション・ストラテジーの指導の流れについて児童の実態に応じて改善していく。

また、本研究では表現の正確さより伝え合おうとする姿勢を重視したが、今後の外国語学習においては、正確な表現の習得も必要となる。伝え合おうとする力の素地を英語表現の定着にどのようにつなげていくかを追究していく必要がある。

【注】

- (1) 山田誠志 (2018) :『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業一使いながら身に付ける英語教育の実現一』日本標準p. 15-16に詳しい。
- (2) 文部科学省 (平成30年) :『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編』開隆堂p. 21に詳しい。
- (3) 大城賢 (2017) :『第2各言語 (英語) の目標及び内容等』のポイントと解説 吉田研作『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書p. 39に詳しい。
- (4) 狩野晶子 (2017) :『第2各言語 (英語) の目標及び内容等』のポイントと解説 吉田研作『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書p. 48に詳しい。
- (5) 卯城祐司 (2013) :『改定小中連携Q&Aと実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂出版p. 10に詳しい。
- (6) 文部科学省 (平成30年) :前掲書p. 11に詳しい。
- (7) 直山木綿子 (2021) :『小学校外国語教育の指導と評価』文溪堂p. 38に詳しい。
- (8) 直山木綿子 (2021) :前掲書pp. 81-82に詳しい。
- (9) 泉恵美子 (2017) a:『小学校英語における児童の方略的能力育成を目指した指導 京都教育大学教育実践研究紀要第17号p. 24に詳しい。 <http://www.kyokyo-u.ac.jp/Cecec/17-03.pdf> (最終アクセス令和4年2月22日)
- (10) 清水遥 (2018) :『関連領域から見る初等外国語教育』卯城祐司『MINERVAはじめて学ぶ教科教育⑤初等外国語教育』ミネルヴァ書房pp. 37-38に詳しい。表は、M.Canale & M.Swain (1980) M.Canale (1980) が基になっている。
- (11) 清水遥 (2018) :前掲書p. 39に詳しい。図は、S.Savignonのコミュニケーション能力の逆ピラミッドを日本の外国語教育に当てはめた松川禮子・大城賢 (2008) が基になっている。
- (12) 狩野晶子 (2017) :前掲書p. 49に詳しい。
- (13) 泉恵美子 (2017) b:『Q&A小学英语指導法辞典 教師の質問112に答える』教育出版pp. 65-66に詳しい。
- (14) 泉恵美子 (2017) a:前掲書p. 27に詳しい。
- (15) 泉恵美子 (2017) a:前掲書p. 31に詳しい。

【引用文献】

- (1) 文部科学省 (平成29年告示) :『小学校学習指導要領』p. 169
- (2) 文部科学省 (平成30年) :『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編』開隆堂p. 14
- (3) 文部科学省 (平成30年) :前掲書p. 33
- (4) 文部科学省 (平成30年) :前掲書p. 28
- (5) 文部科学省 (平成29年) :『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』p. 23 https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusa/gaikokugogo/icsFiles/fieldfile/2017/07/07/1387503_1.pdf (最終アクセス令和4年2月22日)
- (6) 狩野晶子 (2017) :『第2各言語 (英語) の目標及び内容等』のポイントと解説 吉田研作『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書p. 49